

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32704

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17470

研究課題名（和文）ケアの場における患者にとっての「ふれられる・ふれる」体験

研究課題名（英文）Experience of "touch - being touched" for patients in care settings.

研究代表者

島田 多佳子（SHIMADA, Takako）

関東学院大学・看護学部・教授

研究者番号：00310409

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的：本研究では、ケア場面における患者にとっての「ふれられる・ふれる」体験構造を現象学的手法により明らかにした。研究方法：調査会社から入院経験があり、看護師からケアを受けた体験のある方を紹介頂いた後、同意が得られた協力者にオンラインインタビューを実施しデータを逐語録に起こし、内容分析した。結果と考察：十分に語られた研究協力者6名から次の成果が得られた。ケアにおいて「触れる」ことで確認や安全が守られている状況を作り出し、安心感を生じさせていた。看護師が「十分に」ケアすることで、満足や気持ちよさ、嬉しさを引き出していた。「傍にいて」声掛けや観察は感覚の取り戻しや、意欲や満足感につながっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「触れる」「触れられる」事象についての過去の研究を概観すると、物理的に触れること、あるいは触れられることを前提として研究がなされてきた経緯がある。しかしながら、ケアの場においては、「心に触れる」「触れ合う」ということがその人にとっての健康回復に大きく関わる状況もあることから、その事象の体験構造を明らかにすることで、触れることが看護技術としてどのように立ち得るのかを探求する意義がある。本研究は、十分なケアが満足や気持ちよさ、嬉しさを引き出すことや、傍にいて声掛けをすることなどが、相手の感覚の取り戻しや、意欲、満足感につながっていることが明らかとなり、触れることの本質構造を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：Research Objective: This study will use phenomenological methods to clarify the structure of the patient's experience of being touched in "care" situations. Research Methods: After the research company introduced us to people who had been hospitalized and had received care from nurses, the researcher explained the research, and after obtaining consent, we conducted online interviews with the collaborators the data, and analyzed the content. Results and Discussion: The following results were obtained by analyzing the interview data obtained from six collaborators who fully described the purpose of this study. Touching" in care created a situation of confirmation and safety and generated a sense of security. The nurses provided "sufficient care, which elicited satisfaction, comfort, and happiness. Being by her side and talking to her and observing her led to restoration of sensation, motivation and satisfaction.

研究分野：看護技術 基礎看護学

キーワード：触れる 触れられる ケア 看護技術 体験 現象学

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

先行研究(川原他,2009)において、「ふれる」ケアは、看護師にとって、何らかの効果があることは確かであるが、その現象が、直感的・即応的であるがゆえに、はっきりと意識化して記憶にとどめることができない特徴を持つことが指摘されていた。このことから、「ふれる」という現象の探究方法として、認識以前の経験に光を浴びせることのできる身体論を基軸とした現象学的アプローチの手法によって、捉えどころのない現象の探求ができると考えた。

「ふれる」の研究を概観すると、「タッチ」「タクティールケア」「マッサージ」において、意図的に皮膚を介した触れるケアとしての効果に焦点が当てられてきた。その効果として、疼痛緩和や不安の軽減(山本,2014)、リラックス(近藤,2013)、精神的な安定(三島,2014)、孤独の緩和(大沼,2011)、絆の深まり(石黒,2012)などがあげられており、その機序については副交感神経といった生理的指標により説明がなされてきているものが多い。

これらの研究より、「ふれる」ということが、皮膚に「触れる」ケアの効果に限局される傾向がみられるが、哲学者の坂部は、「ふれる」ことについて、単に触ることではなく、また単なる触覚に尽くされるものでもないことに言及し、次のように述べている。「ふれることは、何らかの程度において自他の区別、内外、能動受動の区別を含めてこれまでの差異化弁別の体系の構造安定的な布置をあらためて無に帰し、根底から揺り動かす相互嵌入の契機を本質的に伴っている」(坂部,1983)。

以上より、「ケア」という観点から「ふれられる・ふれる」という現象を、皮膚を介したケアにとどめず、広く問い捉えなおすことで、人と人との関わりを含めた「ケア」のあり方について新たな見方が探求できると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、看護の中隔概念である「ケア」の意味の探求や営みの問い直しを目指し「ケア」場面における患者にとっての「ふれられる・ふれる」体験構造を現象学的手法により明らかにする。このことで、看護の学問的知識体系および看護技術教育における「ふれる」技術の実践に寄与すると考える。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン：質的記述的研究

2) データ収集：調査会社を通して、事前に本研究の目的や方法等に合致した方をリクルートし、本研究に同意頂いた方をご紹介頂き、書面にて同意頂いた方から基礎情報を得た。テレビ通話にて非構造化インタビュー及びテレビ通話中の患者の表情・しぐさ等の観察を実施した。

3) データ分析：逐語記録は、匿名化し、逐語記録は何度も読み返し、観察内容もふまえ「ふれる・ふれられる」がいかに語られるのかに注目し語られ方を当事者の視点から分析・解釈した。

4) 倫理的配慮

所属の「人に関する研究倫理審査委員会」の承認を得て研究を実施した。

・匿名性の保持

研究で得た情報及び収集した内容は本研究の目的のみに用い、収集時から公表時に至る全過程においてすべて匿名性を遵守した。「所属大学研究倫理規準」、「所属大学における人に関する研究倫理規程」、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守した。

・研究参加の同意

通信テスト時に改めて、口頭にて研究目的・方法について研究者が直接、研究対象者への説明を行い、研究の協力は、参加は任意であること、実施に同意しない場合であっても何ら不利益を受けないこと、個人に関する情報の開示を求める権利があること等を含めて説明した。

4. 研究成果

本研究目的に沿った内容が十分に語られた入院経験のある研究協力者6名に協力頂いた。

データ収集期間は、2021年1月～3月(研究協力者の詳細は表1の通り)。

表1 インタビュー協力者の基礎的情報とケア種別・日数

	入院時 病名	入院時に看護ケアを受けた日数 (看護ケアを受けた回数)										性別	年齢	入院 日数
		環境	食事	排泄	清潔	活動休息	呼吸循環	処置 救命救急	苦痛安楽	安全確保	その他			
A	心筋 梗塞	10 (10)	10 (10)	7 (10)	10 (10)	10 (10)	7 (10)		7 (10)	10 (10)		男性	60 歳代	30
B	頸椎症	10 (10)	7 (10)	10 (10)	10 (10)	10 (10)	5 (7)	2 (6)	3 (10)	10 (10)	10 (10)	女性	70 歳代	85
C	中耳炎	10 (10)			10 (10)	10 (10)			10 (10)	10 (10)		女性	20 歳代	10
D	白内 (両目)	10 (10)	10 (10)	2 (2)	10 (10)	2 (10)				10 (10)		女性	60 歳代	10
E	大動脈 解離		10 (10)	10 (10)			10 (10)			10 (10)		男性	50 歳代	40
F	心筋梗 塞・ 脳梗塞	10 (10)	10 (10)	10 (10)	10 (10)	10 (10)	10 (10)					男性	50 歳代	70

インタビューデータの内容を分析し、次の4つのテーマが抽出された。【体感や応答を通した触れるケア】【「触れる」ケアの気持ちよさと安心】【「傍にいる」ことを通した意欲】【「触れる」ことを通した協働】

看護師が「触れる」ことで伴われる患者の体感、初次的な層の感覚を素地としながら、それが意味合いを帯びたものとして、患者に「すんなり」と受け入れられるような認識の層へとつながることで、その行為自体が看護ケアとして成り立つと考えられた。患者の状況や「触れられた」感覚次第では「触れられる」ことが、患者にとって「すんなり」と受け入れられる経験でなければ、ケアとしての意味はなさないことが明らかとなった。

意識が曖昧な状態において、看護師の「声かけ」という言語的接触へ患者が「応答」することを通して、「いつも」状態へと戻してくれる可能性のある看護ケアとして成り立つ可能性が示唆された。それには、「常に傍にいる」存在として看護師がいるということが大切である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Takako Shimada
2. 発表標題 Analyzing the Concept of FURERU
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takako Shimada
2. 発表標題 Touching and being touched" experiences for patients in the care setting
3. 学会等名 The 40th International Human Science Research Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------